

## 野村貞則『こころやり』翻刻・解題(1)

— 福岡市博物館蔵 野村望東尼資料から —

A reprint of “KOKOROYARI” by Sadanori Nomura with explanatory Notes (1)

— From the Collection Botoni Nomura stored in the Fukuoka City Museum —

進 藤 康 子

## 解 題

野村貞則の家集『こころやり』の翻刻である。江戸時代後期、筑前の和歌の師二川相近、大隈言道、谷川幹辰などとの交流の跡を本資料の詞書や歌から辿ることが出来る。

貞則は、嘉永四年に、三十八歳で自害する。(1813~1851) 卯左衛門とも称した。幼名は辰三郎。野村貞貫の長男。野村望東尼は継母にあたる。望東尼は貞則と血のつながりはないが、大切なわが子として見守るやさしい気持ちが随所にあり、二人の親子関係のよさ、信頼関係の深さを知る。父貞貫、義母望東尼ともに大隈言道門下生であることから、貞則の『こころやり』から言道の様々な言動を新たに採取でき、当時を髣髴とさせる。貞則の妻は、神代與三兵衛勝利の娘種子、やはり大隈言道門下であった。貞則没後、種子は、智鏡(鏡)と称した。貞則と種子の間に長男貞和(才丸)、二男貞省(助作)がいる。長男貞和は、十一歳で馬廻組三百三十石を継ぐも、神経痛で手足を煩う。それを心配する望東尼の姿が『向陵集』に見られる。二男貞省は、太宰府に滞在していた尊王攘夷派三条実美ら五卿の接待役を引き受けた。祖母望東尼からの思想の影響は大きかったであろう。

以上、本稿は、地元福岡市博物館に残る貴重な野村望東尼遺品和歌資料の中にある、今まで採り上げられることのなかった新資料『こころやり』に光をあてたものである。資料請求番号は野村望東尼資料031。

## (一) 凡例

- 一、福岡市博物館蔵、野村望東尼資料『こころやり』を底本とした。
- 二、和歌に一連の通し番号を付した。
- 三、表記はできるだけ底本の記載通りに翻刻す

ることを基本とした。漢字平仮名も全て底本のままとした。ただし、繰り返し記号の「ヽ」「〜」「ク」などは、便宜上、現行の文字に改めた。

- 四、清濁を区別し、適宜句読点を補った。
- 五、丁うつりは「」で示し、丁の表裏はオ・ウと表示した。

- 六、明らかな誤記、意味不明などの場合は、その箇所を(ママ)と記した。
- 七、破れ、虫食いなどで解読は不能な場合には、その箇所の字数分を、□として示した。
- 八、歌数十、二十、三十、四十などの欄外への書き入れは、そのまま翻刻した。
- 九、〈 〉には、私に仮名を振った。

(二) 書誌

- 一、資料請求番号 031 福岡市博物館  
野村望東尼遺品目録
- 二、書型 縦 12.0cm 横 17.6cm

横本

- 三、巻冊 一卷一冊 写本
- 四、和歌一首二行書 一面 17~18行
- 五、表紙 墨書直書 「こころやり」 本文共紙
- 六、料紙 楮紙 こより綴  
五冊合綴(春、夏、秋、冬、恋、雑歌、祝歌、悲歌)
- 七、一丁表に作者名「貞則」
- 八、最後尾に「天保十四年辛丑歳春二月書」と書き付けあり。

(三) 翻刻

こころやり 」（表紙）

春歌

貞則

1. 昨日までまばらに見えし梅の花けふは春とてさきまさりける
2. あまたたび春の野辺にはこしかどもうぐひすのねはけふぞききつる
3. やまざとはうめの盛りに成ぬるをみやこの人のなどこざるらん
4. くる人もなきのべながらうぐひすをともしすめばさびしくもなし
5. 雨ふらばもゆるわかなもあらましを冬のままなるのべのさびしさ
6. うめの花きさいでぬればやまざともものさびしくはあらじとぞおもふ

7. うめの花うつろふみればはるの日の過にしほどもしられける哉

8. はるくればゆく人もなき山ざとにいくらの花があだにちるらむ

」(1. オ)

9. なづみにとさそひしともはのべにしてこのはる雨にぬれてしぬらし

10. ねやのうちに吹来風のにほふかなこよひやそのうめはさくらむ

十

11. 朝まだき雨はふり出ぬはるののにけふはゆかしとおもひしものを

12. なにごともわすれてはてつうめの花よのうきときに見るばかりけり

13. はるたちてほどはへぬれどうぐひすの庭のこのまにきゐるだに見ず

14. けさまだきおきふしほども夕さればわするばかりのはるのひとひか

15. きそのよのゆめにし花の見えつるはけふこのもとにまとゐせんとか

16. さくら花さくをまつまははるのひのすぐるもをしとおもはざりける

17. 残なく梢の花はちりにけり雨のなごりのつゆばかりして

18. 古郷のひばりなくのぞなつかしきみやこにすみてとしのへぬれば

」(1. ウ)

19. ちる花のうきてながる庭たづみながれるはてぞ春のかたみ□

20. すがのねの長きはるひのかひもなくやがても花は見らずなりぬる

二十

21. けふはまだ吹風さむく成にけりかくては花もさかじとぞおもふ

22. おほのなるきの山もりにこととはんそまのさわらびおひやしめると
23. のどかなるひにだにちりしうめの花こよひの風におもひやるかな
24. ふく風のおとにねざめぬわがそのの花のさかりのゆめを見つれば
25. 立かへるはるまちなねてわがそののかきほのうめはさきいでにけり
26. わがそののうえきはるまじ秋さればなつかしげなる花もこそさけ

」(2. オ)

27. ふりいづるこよひの雨に鶯も盛りの花もぬれぬべらなり
28. のどかなるひにだにちりし梅花こよひの風におもひやる哉
29. かすみ立のべにもいはず鶯のたつまもなしにそのにきなけば
30. うぐひすのなくこゑただすきこゆ也けさやそのふのうめはちるらん

三十

31. わがさとの雪のうちなる梅の花さきいでひとりはるめきにけり
32. うつくしくつもれるのべの白雪をたがまづわけてわがなづむべき
33. 梅がえのふくみと見しは暁の雨のなごりのつゆにありける
34. いかばかりみやこの人のまちぬらしこの山陰の鶯のこゑ

」(2. ウ)

35. 笛吹のしらべの音ぞきこゆなるくれゆく春をたがをしむらむ
36. あすよりは限ゆかまし鶯のなくねときかでけふも暮なば

37. ゆめにだに嬉しかりつるさくら花まことも庭にさきにける哉

38. わがやどの庭のさくらの花盛雨のうちにも過ぬべきかな

はじめてゆきけるところの庭に

わすれ草の生て侍りければ

39. 生そむる君がそのふのわすれ草けふのまとゐはわすれざらなん

40. のべ見れどかすみもたたず成ぬるははるくれかたやちかくなるらん

四十

41. さくら花盛になれば久かたのめぐるる月もみちになる哉

」(3. オ)

42. 朝雪に見まくほしきを山ざくらかすみにのみはかくれざらなん

43. 庭もせにさき乱たる花なればちりはつるまも久しからまし

山の花見にまかりて

44. 家にしておもひやられしこのもとにけふこそ来ぬれおもふ人どち

45. おのづからちりゆくものを桜花きのふは風をうらみつる哉

46. ひとたびもまたゆかなくにさくらさくよしのの山のゆめに見ゆらん

47. ふる雨の音まさりけりさくら花今夜はいたくちりぬべきかな

48. よのまにも見つつぬらましさくら花さかりのほどは月夜なるらん

」(3. ウ)

49. 春ははやよしのの山のおくにだにのこれる花はあらじとぞおもふ

50. みやこへにゆく人あらば山ざくら見るひとなしにちるといはなん

51. はるののにくる人おほみかぞふればけふぞことしのねのひなりける
52. わがやどは小松が原の遣ければなにをかひかんけふのねのひに
53. けふもまたゆふくれかたになりけるかすめるのべを行かへりつつ
54. はる雨にいたくやうめのちりぬらんなくうぐひすのこゑのかなしき
55. はる雨にちりなばしめそ梅花みすべき人もいまだこなくに
56. さくら花さかぬ限はみよしののよしののさともさびしからまし

」(4. オ)

57. さくら花さかずあるらしふる郷のこけらに人のあとしなれば
58. くれぬとてかへりし人に見せてしか花のこのまをいづる月かけ

山のはに月はいるともさくら花  
といひけるに

59. さけるこのまはたらじとぞおもふ

花のうた

60. ふく風にいろめく庭のさくら花たがおもかけになぞらへるべき

六十

61. さきのこるえださへ見えずなりにけりけふやさくらのさかりならまし
62. ふる雨にまだきなちりそ桜花くれゆくはるのはてまでにさけ
63. ちりはててひかずへぬればさくら花ゆめにも見えずなりにける哉

64. かたえだにとくさきいでんさくら花またぬ時なきこころやすめに

」(4・ウ)

65. ただひと夜ふりにし雨にはざくらおどろくばかりさきまさりけり

66. おいぬればはる山のべにさく花のちるもちらぬもきくばかりなり

67. わがやどのさくらはまだきちりにけりまたゆくはるのはてもこなくに

68. おのづからなりゆくものをさくら花きのふは風をうらみつる哉

69. かすやなるふたせの河もわがやどの□□見るごとや花はちるらん

70. ふる雨のおとまさりけりさくら花こよひはいたくちりぬべきかな

七十

71. よのまにも見つつあらましさくら花盛りの影は月夜ならなん

72. いつよりもをしきはるかな鶯のなくねもきかでくれぬとおもへば

」(5・オ)

73. はるの日のものさびしさにただ独かすみたな引のべにきにけり

74. おしなべてつもりしゆきの一本(ひともと)にききのこれりと見ゆるうめかも

75. おのがさくはるはきゐると梅の花いつをまちてかにほひてもせぬ

76. はるののはましろくゆきぞつもりぬるいづこにゆきてわかなつままし

77. はるのののわかなつみにはこしかども吹風寒み家ぞこひしき

78. けふもまたわかなつみにやいでなましわれを問くる人しなければ

79. うめはまださきぬるえだもなかりけりとほきやまべにこしかひもなく

80. 鶯のこゑをほのかにききしよりわかなつみにもいはずなりぬる

八十

しはすのすゑつかたうめの花を見て  
おさなき娘をうしなひたる人を忍

81. なき人のおやには見せじ梅の花おもかげにのみよそへられつつ

82. かぜふけどわがやまかげの梅のみはこころやすげにさかりなりけり

83. よのなかをのがれんよしぞなかりけるやまべにさとのあるかひもなく

84. むかしわがすみにしやどのうめの花ものさびしらに盛なりけり

85. わがやどはさびしくなりぬ梅の花おくれてにほふさとにゆかまし

86. きくかたになみだぞ落るうめの花ちりふしのちのうぐひすのこゑ

87. みるたびにさきそひにしを梅華今は日ごとにちりまさる哉

88. 朝けよりまでどもさそふ人もなし <sup>〈ひとり〉</sup> 独やはるののべにいでなん

」(6・オ)

(つづく)